

## 芥川賞、取れなかった幸運

長谷川 修

芥川賞は、昭和十年、文藝春秋社社長菊池寛の発意によって設けられた新進の作家に与えられる賞で、長い歴史を持つ。殊に昭和四十年頃までは純文学小説で唯一最大の新人賞で、その当落は作家の生涯に様々な影響を与えた。

当選した組では、安部公房、大江健三郎、中上健次のようにその後大成した作家は多いが、純文学が書けなくなって筆を折った人、時代小説や娯楽小説に転向した人も少なくない。一方、候補に挙げられながら落選した組には、戦前の太宰治、中島敦、昭和三十年代の有吉佐和子、吉村昭、五十年代の村上春樹、島田雅彦等、後に活躍する作家がいる。こう見ると、芥川賞の当落はその回の競合作品や選考委員の文学観などによって左右され、運不運がある。

吉村昭は、三十代の中頃に四度芥川賞の候補となるが落選が続く。そのうち、妻の津村節子は候補二年目で当選する。吉村はくじけずに会社勤めのかたわら小説を書き、四十歳で、短編「星への旅」で太宰治賞を受け、長編ドキュメント「戦艦武蔵」も単行本化され、ようやく作家として自立した。

その後の活躍は目覚ましく、記録文学としては『関東大震災』、『三陸海岸大津波』、『海も暮れきる』（俳人尾崎方哉の生涯）、『破獄』（無期懲役刑囚の四度の脱獄）等があり、いずれも関係者への取材と丹念な調査に基づいて書かれている。調べて書く手法は歴史にも及び『ポーツマスの旗 外相・小村寿太郎』、『長英逃亡』、『桜田門外ノ変』、『落日の宴 勘定奉行川路聖謨』等歴史小説の長編名作を残した。吉村の歴史小説は史実に忠実で「史実にこそ人間のドラマがある」と、森鷗外の史伝物に連なる。また純文学の短編も生涯書き続け、遺作となった「死顔」（会葬者に死顔をさらす昨今の風潮への違和感から、兄の葬儀が気にかかる話）は名品だ。

吉村は自分の芥川賞について、「取れなくて良かったと思っています。選ばれていたら今のような分野の仕事はなかったでしょう」と語っている。